やる気・世直し・手弁当

理事長　阪口　光男

私たちに求められていること

「もっと気合をいれて仕事をしろ」「革命を起こせ」「給料なしで働け」というのですか。と表題を見ての声が聞こえてきそうです。真意は、現実社会の福祉課題を受けとめ、制度の枠や日々の仕事にのみ捕らわれることなく、向き合う人の「痛み」を解決するために力を合わせる姿勢をあらためて共有したいということなのです。

湧き上がってくるもの

毎日の報道で、福祉に関わる社会的な問題が報じられています。見えている課題は氷山の一角で、水面下には、もっと深刻な問題が多く存在することを感じさせられます。又、現場でも、一人ひとりの可能性を拒み、それを奪っている現実にぶつかり『何かしなければ』『解決するには何をしたら』『どうやってやる』と心の奥底に湧き上がってくることがあると思います。それが、やる気（＝自立性・連帯性）、世直し（＝先駆性・開発性）、手弁当（＝主体性・行動性）《ボランタリズム》ということです。『むり・できない・むずかしい』を捨て『イノベーション』に取り組む姿勢でもあります。

いま少し高く

ヘレン・ケーラーは、『いま少しあなたのランプを高く掲げてください』と呼びかけます。大それたことをするのではなく、日々の営みの中で、一人ひとりのささやかな意志と努力を重ねて行く姿勢が求められているのです。大海は一滴からはじまります。現状にとどまることなく、小さなことを変革する姿勢が全体社会の創造に繋がります。

あらゆる手を尽くして

ドイツに、ベーテルという障がいのある人が仕事をし、病院、学校、商店等があり、共に生活している町があります。第二次世界大戦の時に、ナチスの障がい者殺害計画に抵抗して、そこで暮らす人々の命を守り抜いた町です。ドイツの良心とも言われます。　Ａ氏がこの町を訪れた時の話です。ベーテルの責任者に「一年間の予算はどのくらいですか」と質問しました。すると「知りません」との答え。Ａ氏は「それで経営が出来るのですか」と問うと、「あなたは予算をしらないと福祉事業の経営が出来ないのですか」との回答。Ａ氏は《そんな事は当然でしょう！》と思ったそうですが、その真意を想いめぐらした時、『福祉事業』は予算・制度が先なのではなく、痛みを持つ人の（ニーズ）を受け止め、課題を解決するために必要な資金を、あらゆる手を尽くして確保する姿勢こそが福祉経営の姿勢でなければなならないと教えられたそうです。

心に刻んで

一人の痛みを共に担い、誰もが幸せになるために行動をするのが社会福祉法人（民間社会福祉事業）の姿勢でなければなりません。今日の福祉社会は、ニードがあれば対応するという思想・理念・生き方から行動した先人によって形成されてきました。安定した経営・運営をし、職員一人ひとりも安心して生活が出来るマネジメントをおろそかにしてはいけません。と同時に制度や予算に縛られ、取り組まなければならないことに目をつむり、問題を閉じ込めてはいけません。私たちの使命は、向き合う人の「痛みを受け止め、感じ、和らげるための行動」をすることにあります。

このことを、私たち一人ひとりが心に刻んで、2025年度の歩みを進めて行きたいと願っています。